

勝俣範之, 東 光久 (編)

ジェネラリストのための がん診療ポケットブック

渡辺 亨

浜松オンコロジーセンター院長

二人に一人が罹患するほど、がんは「当たり前の」疾患であり、肺がん、胃がん、大腸がん、乳がん、肝臓がんは、罹患率、死亡率も高く「五大がん」と呼ばれています。他にも前立腺がん、子宮頸がん検診が公費負担されており、卵巣がん、膵臓がん、膀胱がん、食道がんなども、医療者から見て何ら特別な病気ではありません。

がん治療として、最初に発展したのは外科手術、次に放射線治療で、これらは局所治療と分類されます。一方、現在は全身治療として、抗がん剤などの薬物療法が治療の主体を担っており、がん診療を専門としている病院、診療所も全国に多数整備されています。昭和の時代、がん薬物療法を受ける患者は、副作用に苦しみながら数週間入院するのが当たり前でした。しかし、好中球増加因子 (G-CSF)、制吐剤、抗生剤など、

各種の有効な副作用対策薬の開発とともに、モノクローナル抗体薬、ホルモン療法薬、免疫チェックポイント阻害薬など、新しい作用機序を持ち、優れた効果が得られる治療薬が導入され、「外来化学療法室」が専門病院に整備され、今やがんの薬物療法は通院で受ける時代、がんと共に生活を送り、仕事を続ける人が増えています。通院でがん薬物療法を受けている患者は、治療の間に生じる副作用の苦痛、病院を離れている不安などから、頻繁に病院受診を希望しますが、予約が取りにくい、受診しても待ち時間がすごく長い、担当医は手術中で対応できない、偉い先生は学会出張で不在、など必ずしも満足できるとは言えません。一方で、広範囲の診療能力を有する「ジェネラリスト」がかかりつけ医として 21 世紀の医療を支えています。

今般、医学書院より出版された『ジェネラリストのための がん診療ポケットブック』は、コモンディーズであるがんの診療に、さらに多くのジェネラリストの参画を促す卓越した良書です。本書の第 1 章に「本当のがん診療とは、『がん』という疾患の診療ではなく、『がん』という疾患をもつ患者のために行われる診療である」とあります。まさに、がん治療のスペシャリストと、全人的医療を担うジェネラリストがハイレベルな連携を構築することが、全てのがん患者を最高の幸福に導く鍵となるでしょう。

● A6/頁 288/2022 年 04 月

定価：4,180 円

(本体 3,800 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-04922-1]

医学書院 刊